豊中市 教育保育環境 ガイドライン　評価シート（幼児編）

プロセス（過程）の質　評価の柱	時　間： クラス： 年　令：	特　徴： 児童数： 障害児の数:	実施日： 評価者：		
	ねらい	評価結果			
Ⅰ　空間と家具		1	2	3	4
①日常のケアー、遊び・学びのための教材・家具・備品	安心し、楽しく過ごせる				
②遊びのための室内構成（1人、2人のための空間・子どもに関する展示）	気持ちの良い生活ができる				
③粗大運動遊びのための空間設備・備品（滑り台・三輪車など）	適切な活動を選び身体を動かして充実感や満足感を得る				
Ⅱ　養護個人的な日常のケアー　（生活の環境づくり）		1	2	3	4
①食育	食べることを楽しむ				
②排泄	自分で用を足せる				
③休息	身体を休めて休息の時間を過ごす				
④保健衛生	自分の身体を大切にする気持ちをもつ				
⑤安全	安全に気をつけて行動する				
Ⅲ　言語と文字、思考力		1	2	3	4
①語彙の拡大・思考力を育てる語り掛け	未知の言葉と出会い話す楽しさを知る				
②伝え合い・コミュニケーション（話し言葉の促進）	好奇心を引き出し、言葉のやり取りを楽しむ				
③絵本　（印刷文字に親しむ環境）	文字に出会い、絵本の楽しさ　探す・知る喜びを味わう				
Ⅳ　活動　（環境があるかどうか）		1	2	3	4
①運動（粗大運動・体を使う）	身体を動かすさまざまな活動を十分に楽しむ				
②運動（微細運動・手や指を使う）	手や指を使い集中して遊ぶ				
③造形	作ったり描いたりしてさまざまな表現を楽しむ				
④音楽リズム	感じたことや考えたことを音や動きで楽しむ				
⑤ごっこ遊び	イメージを形にして楽しみ、友達と共有する				
⑥ 積木	構成を楽しみ、思いを表現し、友達と共有する				
⑦ 砂・水	砂や水に触れ、感触遊びを楽しむ				
⑧自然・科学	自然に触れ、好奇心や探求心をもつ				
⑨ 算数・数	遊びや生活の中で数、量、形に親しみ数字の意味に気付く				
⑩ ICTの活用	テクノロジーで遊びや生活の幅を広げる				
⑪多様性の受容	人に違うところと同じところがあることに気付く				

		1	2	3	4
Ⅴ 相互関係					
①個別的な指導と学び(子ども理解と子ども理解の上に立った保育者の関わり)	一人ひとりの特性に応じた指導に支えられて学びに向かう				
②保育者と子どものやり取り(保育者と子どもの関係)	子どもが尊重され、認められ、支えられる				
③子どもと子どものやり取り	他の幼児の考えや感じ方に触れる				
④望ましい態度・習慣の育成	自分でしなくてはならないことを自覚して行う				
Ⅵ 保育の構造(日課)		1	2	3	4
①1人1人が自由に遊びを選択して遊ぶ活動	活動を楽しむ中で、自分で考えたり助けを得たりする				
②クラス集団で遊ぶ活動	他の幼児や保育者と親しみ合い、支え合う				
③障害のある子への配慮	ともに育つ意識を持って支え合う				
④家庭に配慮を要する子どもへの関わり	適切な対応や援助ができるように関わる				

【総合評価・メモ】(見えてきた課題など)

Ⅰ　空間と家具

1:不適切　2:最低限　3:よい　4:とてもよい

幼児編

① 日常のケアー、遊び・学びのための教材・家具・備品

＜項目の視点＞
★ 基本的な家具・ロッカーの設置
★ 誰でも出入りできる室内（障害がある、あるいは保護者の出入り）
★ パーソナルな場所、落ち着ける場所
★ 遊びのための室内構成

段階		評価項目	いいえ	はい
1	1-1	生活のための必要な家具や設備がない（自然の採光がなく、換気も十分でない）		
	1-2	保育室が狭く、出入りできる人が限られているなど生活のための動線が考えられていない		
	1-3	自分の持ち物を整理しておく場所がないなど個人のスペースがない		
	1-4	遊べるスペースが十分ではなく、十分に遊ぶことができない		

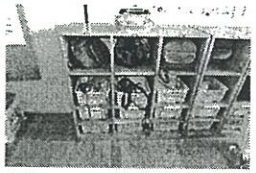
段階		評価項目	はい	いいえ
2	2-1	生活（食事　休息など）や遊びのための必要な家具、設備が揃っている		
	2-2	保育者、保護者、子どもが自由に出入りでき、動線が考えられた生活スペースがある		
	2-3	子ども自ら持ち物の整理整頓ができるロッカーがある		
	2-4	遊べるスペースがあり、コーナーが確保されている		
3	3-1	生活のための家具が年齢や個別ケアに対して充実している		
	3-2	子ども達の動線を見据えて生活スペース・遊びのスペースが確保されている		
	3-3	遊びのコーナーの中に、一人または少人数で遊べるスペースがある		
	3-4	子どもの興味関心のある遊びのコーナーが2つはある		
4	4-1	生活のための家具は誰もが使いやすく工夫されている		
	4-2	生活する場（食事・着替え）と遊びを楽しむ場のスペースが分かれていて遊びの継続が確保できる		
	4-3	選べる量と種類の玩具があり、子ども自らが集中して取り組めるような空間が確保されている		
	4-4	コーナーがいくつかあり、連結して遊びを発展させ楽しむことができる空間がある		

備考（注釈・事例など）

給食当番

2-1　自然の採光があり保育室は明るく換気も十分できる。

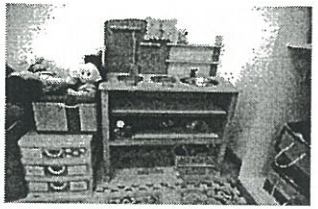
2-2　生活空間の中で給食配膳ができるコーナーが身近にある。



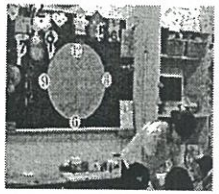
2-3

4-4　子どもの興味関心に合わせてコーナーを作り変えることができる。

memo



3-4　ままごとコーナー



3-1　時計

② 遊びのための室内構成（1人2人のための空間・こどもに関する展示）

＜項目の視点＞

★ 2つ以上の1人または2人で遊べるスペース

★ 保育者の見守りと援助

★ コーナー遊びの時間の確保

★ 展示スペース

段階		評価項目	いいえ	はい
1	1-1	少人数で落ち着ける空間がなく、年齢や育ちに合わない玩具の提供が煩雑にあり整理されていない		
	1-2	保育者は、少人数で遊んでいる子ども達に関わっていない		
	1-3	コーナー遊びが確保されず、遊びの時間がない		
	1-4	子どもの絵の展示や子どものための展示がない		

段階		評価項目	はい	いいえ
2	2-1	少人数で落ち着ける空間があり、特別な配慮を要する障害のある子どもが遊べる場がある		
	2-2	少人数の子ども達が遊んでいるところに保育者がいて、関わっている		
	2-3	コーナー遊びが確保され遊びの時間が30分以上ある		
	2-4	子どもの絵の展示があり、子どものための展示がされている		
3	3-1	1人や2人で遊びを楽しめる区切られたスペースがあり、玩具や道具は子どもの年齢や育ちに合ったものが提供され子どもが使いやすいように収納されている		
	3-2	保育者は、1人または2人で遊べるように遊具の工夫をし、少人数の遊びが保障されるよう見守っている		
	3-3	子どもが納得できるまで遊ぶことのできる時間の確保がある		
	3-4	遊びに興味を持ったり、自分の気持ちを話したりすることに展示が利用されている		
4	4-1	自ら遊びを選択して、遊び込むことができるスペースがある		
	4-2	保育者は、興味のあることを見つける、継続して遊べるように関わっている		
	4-3	部屋を区切ることで多様な遊びができる空間を作り、その中で、十分遊べる時間の確保がある		
	4-4	立体的に作品や活動に必要な情報を展示をするスペースがある		

備考（注釈・事例など）

2-3 子ども同士がやり取りができる遊具の設置をする。（対面キッチン等）

3-1 子ども達自身が見えないと思っている安全に遊べる場所がある。（保育者が見守れる場所）

マイクッション等それを利用して自分で座る・寝転ぶ・人形の枕にする等、安心できるようにする。

4-1 クラスの枠を超えていろいろな子どもが混ざり合って関われるスペースがある。

memo

幼児編

③ 粗大運動遊びのための空間設備・備品（滑り台・三輪車など）

＜項目の視点＞

★ 体を動かして遊べるスペース・遊具

★ 安全性

★ 子どもがいつでも行ける、障害がある子も使える

段階		評価項目	いいえ	はい
1	1-1	体を動かすことができるスペースが戸外にも室内にもない		
	1-2	危険個所が放置されていて使用できない遊具が数か所ある		
	1-3	年齢や能力に応じた遊具が整備されていない		

段階		評価項目	はい	いいえ
2	2-1	体を動かすことができるスペースが戸外にあり、雨の日には室内で体を動かすことができるスペースがある		
	2-2	年齢や能力に応じた遊具が整備され、安全に遊ぶことができる		
	2-3	三輪車等の車輪のある遊具やボール等固定遊具や体を動かして遊べる遊具で遊ぶスペースがある		
3	3-1	体を動かして遊ぶ場所に子どもが容易に行くことができる		
	3-2	つかむ、登る、ぶら下がるなどの粗大運動が保障される固定遊具がある		
	3-3	三輪車で走り回ったり、ボール等で十分に遊ぶことができる広いスペースがある		
4	4-1	三輪車とボール遊びなど異なった遊びが互いに妨げにならないよう遊べるスペースがある		
	4-2	固定遊具の種類が豊富で使用するのに混み合わず使える		
	4-3	年齢や育ちに合った遊具の種類や量が豊富に用意され子どもは待ち時間なく遊ぶことができる		
	4-4	障害のある子どもの必要に応じた遊具がある		

備考（注釈・事例など）

3-1　行動範囲を広げられる自由度がある。

3-2　自由に登れる木や遊具がある。

3-2

4-3

4-3　年齢に応じた種類の三輪車がある。（サイズ・ペダル等）

memo

Ⅱ　養護個人的な日常のケアー（生活の環境づくり）

①　食育

＜項目の視点＞
★ 栄養・量
★ 衛生面
★ 食事の内容・時間食事の仕方が年齢への適正と個別配慮
★ 保育者の関わり

段階		評価項目	いいえ	はい
1	1-1	栄養や量が適切でない		
	1-2	衛生面での配慮が不十分である		
	1-3	同じメニューが繰り返されるなど、年齢に応じた内容になっていない		
	1-4	食事を楽しんで食べられるような雰囲気でなく、保育者は楽しめるような関わりをしていない		

段階		評価項目	はい	いいえ
2	2-1	栄養や量が適切で、アレルギー児は、代替メニューが用意されている		
	2-2	配膳スペースは清潔で、食前の手洗いが徹底され、清潔習慣が示されている		
	2-3	主菜といくつかの副菜で構成された食事の提供があり、年齢に合わせた食材の切り方などの配慮がある		
	2-4	保育者は、落ち着いて食事をする空間を保障し、見守りながら、食事に興味がもてるような会話をしている		
3	3-1	栄養バランスやいろどりに配慮された献立になっていて、個別に量などを調整できる		
	3-2	配膳時、食事中も衛生的な配慮がされていて、子ども達も理解して行っている		
	3-3	食材そのものに触れる（じゃが芋・人参の水洗い・菜園活動など）機会があり食材に興味を持つ工夫がされている		
	3-4	保育者は、楽しい雰囲気を作り、子どもが食べてみようと思えるように関わる		
4	4-1	アレルギーや宗教食など個別に対応できるメニューが提供されている		
	4-2	安全な食事の提供のため、消毒や検便が行われ、研修などで、全職員に徹底されている		
	4-3	伝統的な食べ物、いろいろな地域や国の食文化に触れるメニューがある		
	4-4	保育者は、植物や動物の命を頂いていることを知らせ、大切に食べることの大切さを保育の中で伝えている		
	4-5	菜園活動を通して収穫した野菜でクッキングをする機会がある		

備考（注釈・事例など）

1-3　乳幼児の食事が麺ばかりでよいというわけではない。また、メニューが、どんぶり物ばかりであったり、主食・副食と分かれておらず全てが器の中にごちゃまぜに納まっているなどに、なっていないかを見ていく。

3-3

3-3　素材そのものが味わえるようなメニューになっている。素材に親しむ機会がある。

3-4　料理の仕方や食材によって、いろいろな食具を使って食べる。

調理室の匂いがしてくる。調理している様子が、見えるなど。

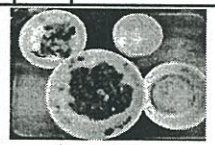
4-3　日本ならではの献立（七草がゆなど）や、外国のメニューなどがある。

4-4　全体計画の食育指導計画を参考にする。

4-5　五感を使って味わえるような工夫がされている旬の食材を使った献立がある。

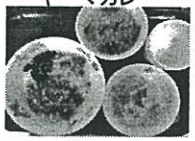
memo

ひな祭りメニュー

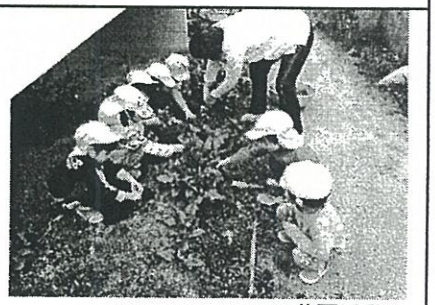


キーマカレー

七草粥



ビビンパ



4-5 菜園活動

幼児編

② 排泄

＜項目の視点＞
★ 衛生面
★ 場所や備品
★ 保育者の関わり
★ プライバシーに関しての配慮

段階		評価項目	いいえ	はい	備考（注釈・事例など）
1	1-1	トイレが衛生的でない			
	1-2	必要な備品などが揃っていない			1-2 備品→トイレットペーパー、タオル、石鹸など。
	1-3	保育者は子どもにトイレに行くことを強制したり、反対に注意を払わなかったりなどの対応をしている			
	1-4	着替える場所が確保されていない、また、誰からでも見られる場所である			
段階			はい	いいえ	
2	2-1	トイレは衛生的で清潔である			
	2-2	自分で排泄できる便器（高さ　大きさなど）がある			
	2-3	必要な備品が揃っている			
	2-4	保育者の見守りがあり、必要な言葉掛けなどがなされている			2-4 低年齢児用はいつでも言葉を掛けられる場所にある。
	2-5	年齢に応じたプライバシーが守られている			
3	3-1	トイレは明るく衛生的で常に清潔が保たれている			2-5 年齢に応じてトイレのドアが設置されている。着替える場所が衛生的で、プライバシーが守られている。
	3-2	子どもは行きたい時にトイレに行けるなど大人の強制がなく、発達に応じた排泄への誘いかけや促しがある			
	3-3	保育者の見守りのもと、子どもが自分で後始末しようとしたり手を洗うなどの一連の動作ができる			3-3 子どもは用便の手順が分かり正しく実行できる。
4	4-1	トイレは明るく衛生的で使いやすい作りになっている			4-1 家庭と同じように使えるなど、温かい雰囲気になっている。
	4-2	障害児用や発達に応じた排泄場所が整備されている			
	4-3	保育者は子ども一人一人の性質や必要性に対応した言葉掛けや促しを行っている			

memo

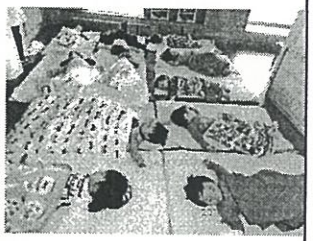
トイレの備品

③ 休息

＜項目の視点＞
★ 衛生面
★ 休息するスペース
★ 個別対応
★ 保育者の関わり

段階		評価項目	いいえ	はい	備考（注釈・事例など）
1	1-1	寝具は定期的に洗濯するなどシーツやタオルケットのなどの清潔が保たれていない			
	1-2	明るい、騒々しいなど休息できる場所がない			
	1-3	保育者は、午睡時、眠たくなくても寝かそうとし、真っ暗で子どもの様子を見ていない			
段階		評価項目	はい	いいえ	
2	2-1	衛生的な寝具があり、定期的に洗濯など、清潔が保たれている			2-1　速乾性の寝具を使用するなど。
	2-2	静かに寝ることができるスペースがある			
	2-3	休息時に適切な保育者の見守りが行われている			
3	3-1	寝具が衛生的な状態で、休みたい時に休める場所がある			3-1　午睡時間に起きていたい子どもの場所が確保されている。（本が読める　静かに過ごせる場所があるなど）
	3-2	寝たくない時に静かに過ごせる場所がある			
	3-3	個々の状況に合わせて、休息できるように関わりや場所を変えている			
4	4-1	個別に適した休息の場所が保障されている			
	4-2	年齢や体力に合わせた午睡の取り方ができる			
	4-3	保育者は、子どもの状態を把握し、個別に応じて柔軟に調整して、休息の時間を過ごすようにする（机上あそびなど）			4-3　早朝からの長時間保育の子どもは5歳児も午睡をするなど。

memo



幼児編

④ 保健衛生

＜項目の視点＞

★ 保健衛生への注意

★ 保健衛生に関わる備品

★ 保育者の関わり

段階		評価項目	いいえ	はい
1	1-1	保育室の清掃がなされていない		
	1-2	手洗い石鹸・紙タオル・消毒・ティッシュなどの整備がなされていない		
	1-3	保育者は、子どもの保健衛生（手洗いなど）にはほとんど注意が払っていない		
	1-4	子どもが保健衛生について理解する機会がない		

段階		評価項目	はい	いいえ
2	2-1	保育室の行き届いた清掃がなされていて、玩具は定期的に消毒がされ清潔である		
	2-2	手洗い石鹸・紙タオル・消毒・ティッシュなど常備し衛生環境を整えている		
	2-3	外遊びの後などには手洗いやうがいを促す保育者の声かけがある		
	2-4	部屋の清掃やおもちゃの片づけなど、子どもと一緒に行われている		
3	3-1	保育室は行き届いた清掃がなされ園全体が清潔である		
	3-2	歌や絵で示すなど、正しい手洗いの方法が身に付くような環境がある		
	3-3	保育者が手洗いやうがいのモデルになって行っている		
4	4-1	子どもにとっても使いやすいように、衛生用（ティッシュなど）の置き場が明確になっている		
	4-2	年齢に応じて自分の健康を守るための保健衛生に興味が持てる環境がある		

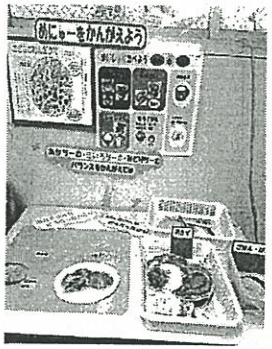
備考（注釈・事例など）

2-2 鼻水が出ていたら自ら清潔にする事が気付けるような環境など。
（手の届く場所にティッシュを置く）

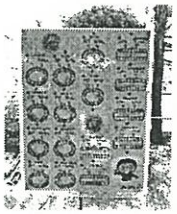
3-2 手洗いの仕方を指導する機会がある。
（手洗いチェッカーなど）

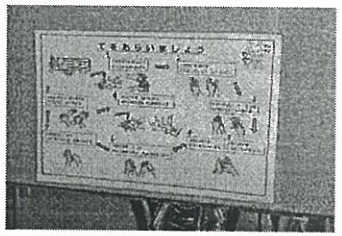
4-2 保健指導などの教材、絵本など。

memo



4-2





⑤ 安全

＜項目の視点＞

★ 危険個所の把握・対応
（遊具・戸外・室内）

★ 危険行為の予測・対応

★ 保育者の関わり

段階		評価項目	いいえ	はい
1	1-1	戸外室内の両方で子どもの安全が守られていない　危険な場所が2か所以上ある		
	1-2	固定遊具など園内を定期的に点検していない		
	1-3	保育者は見守りが不適切で、子どもの行動に注意を払っていない		

段階		評価項目	はい	いいえ
2	2-1	戸外、室内両方で子どもの安全を考えた配慮がされていて、重大な事故をまねきそうな場所はない（指づめ防止扉・コンセントの位置・面取り柱・床）		
	2-2	安全点検日を設定し定期的に遊具、園舎などの点検を行う		
	2-3	保育室に保育者がいる、園庭では全体を見守る職員を配置するなど子どもの行動に注意を払い、危険はないか見守っている		
3	3-1	遊具や自然物も含め、大きなけがをしそうな危険な場所がない		
	3-2	子どもは、主体的にいろいろな経験をし、危険を予測する力を身に付けることができる		
	3-3	保育者は、安全について、遊び方などどう対応するかを園で決め、職員が共通理解をしている		
4	4-1	子どもは、遊具を使うルールに気付く、安全に対する意識が高い		
	4-2	子どもの発達に応じて安全予測を自らできるような関わりや見守りがある		
	4-3	保育者は起こりえる危険と子どもの特性を見極めて、適切な見守りを行っている		

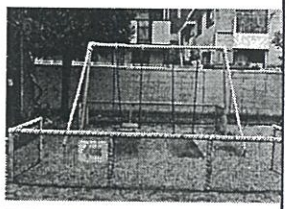
備考（注釈・事例など）

2-1　床の硬さが年齢に応じてフロアのクッションが違うなど、成長を妨げず促せるような建物作りをしている。

2-2　安全点検チェックリストを月に1回必ず見る。

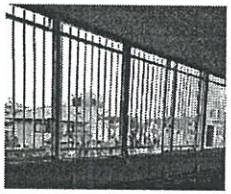
3-2　保育者の見守りや、援助のもと行う。

4-1　危険を予測する力を生活の中でつけていく。（安全意識を持つ）



memo

コンセントカバー



指づめ防止

遊具の安全点検

幼児編

①　語彙の拡大・思考力を育てる語り掛け

＜項目の視点＞
- ★ 子どもの好奇心を引き出す保育者の語り掛け
- ★ 保育者の関わり
- ★ 新しい言葉の獲得
- ★ 子ども自身が調べたり考えたりできる環境

段階		評価項目	いいえ	はい
1	1-1	保育者は「なぜ」などの子どもからの疑問や関心ごとを無視している		
	1-2	保育者は、子どもに対して、決まったケアをするときにだけきまった語彙だけで話し掛ける		
	1-3	新しい言葉を教えるときに、子どもの経験に基づかないで教えている		
	1-4	疑問があっても、それを調べる教材や方法がない		

段階		評価項目	はい	いいえ
2	2-1	保育者は、子どもの興味を引き出すように会話をしている		
	2-2	保育者は、年齢や個人の育ちを理解したうえでその子が興味を持ち、行動に繋げられるように言葉を掛ける		
	2-3	子どもの行動に言葉を添えたり、物と名前が一致するように伝えたりする保育者がいる		
3	3-1	保育者は、子どもからの疑問や関心ごとに具体的な経験を用いて年齢と能力にふさわしい説明を論理的にしている		
	3-2	保育者は、ほとんどの子どもとその子の興味に基づいて個別の会話をしている		
	3-3	保育者は、見た事・感じた事・している事をすべて言葉にして話し掛けるなど、気持ちと言葉がつながるように話し掛けている		
4	4-1	保育者は、子どもの興味に即して考えを広げられるような情報を提示し、論理的に説明し、気付きを引き出す言葉掛けをしている		
	4-2	保育者は、子どもの年齢や個人の育ちに合わせて、考えて答えられるような投げ掛けをしている		
	4-3	保育者は子どもが自分の発見したことや考えたことを伝えたり、深く調べられたりできるように関わる		
	4-4	言葉に困難を持っている子どもの特別な配慮（手話・点字など）があり、周りの子も触れることができる		
	4-5	言葉や、興味を持ったことを調べたり、考えを伝えたりする教材や場所がある		

備考（注釈・事例など）

1-2　決まった語彙だけでなく、「それ」「あれ」など固有名詞を使わない言い方なども含む。

1-3　まだわからないのに、曜日だけで見通しを伝える、どのような花かわからないのに、花の名前だけ教えて、花のことを説明するなど。

2-3　食事の時に、メニューや食材の名前を知らせる。食べる真似をする、動物になりきって動くなど子どもの行動に「おいしそう」「かわいいネコちゃんだね」など言葉をかけることで、言葉と行動が一致する。

3-1　名前だけでなく、その性質を形容詞で表したり、他のものとの関係など、様々な方面から、興味が深まるように話す。

3-3　「いま、どんなきもち？」（大阪人権教育研究協議会）のカードなどを使って自分の気持ちを伝えるなど、気持ちの表現を豊かにする。

4-1　子どもが行ったことの意味付けではなくて、新しいことを提案するような言葉掛け。例えば、水族館で見た魚の話を海のいろいろな生き物や、他の国のことなどより広く考えを広げられるような言葉掛けを行う。

4-2　個人差や、言葉に困難を持っている子に合わせて、その子が興味を広げられるような関わりを心掛ける。

memo

3-1
子どもに分かりやすいカレンダー

② 伝え合い・コミュニケーション（話し言葉の促進）

＜項目の視点＞

★ 保育者の関わり

★ 子ども同士での言葉のやり取り

★ 言葉以外でのやり取り

★ コミュニケーションを促す教材

段階		評価項目	いいえ	はい
1	1-1	子どもが話しかけてきても応答しないか禁止言葉が多く、話すことを止められる		
	1-2	子ども同士が言葉のやり取りをする場面が見られない		
	1-3	言葉以外のやり取りがない		
	1-4	言葉や文字に興味が持てるようなものが何もない		

段階		評価項目	はい	いいえ
2	2-1	保育者は、様々な場面で子どもの語り掛けを肯定的に受け止め、子どもと会話している		
	2-2	子ども同士の言葉のやり取りの場面がある		
	2-3	言葉以外に、しぐさや手話など個別にやり取りできる方法を保育者が使っている		
	2-4	少人数で活動し、言葉を使ったわらべうたなどを使って楽しんでいる		
3	3-1	保育者は、子どもが体験したことを言葉にして伝えられるような機会をいくつか作っている		
	3-2	子ども同士のやり取りの中で、友達との意見や考えの違いに気付き、互いを理解しようとする		
	3-3	言葉以外の表現方法（手話など）や外国の言葉などに触れられるような展示や教材がある		
	3-4	子どもと保育者、子ども同士でやり取りが生まれるような教材がある		
4	4-1	保育者は、子どもが自分の思いを自分の言葉で伝えられるように、じっくりと聞いて関わり子ども同士相談できるようにコメントをするなど、支えている		
	4-2	子ども同士で話し合い、友だちの意見を聞く機会があり、思いの伝え方を共有してやり取りする		
	4-3	言葉に困難を持っている子どもの特別な配慮（手話・点字など）があり、周りの子も触れることができる		
	4-4	考えたことを書いて知らせる機会や教材がある（郵便屋さんごっこなど）		

備考（注釈・事例など）

2-1 子どもに対して、朝は「おはよう」ご飯を食べる時には「いただきます」など挨拶も大事にする。
方言は文化や生活の一部として捉えるなど、子どもの発言を否定しない。

3-2 トラブルの時にそれぞれの思いを保育者が言葉にしてどう表現したらよいか伝える。

3-3 その子の発するコミュニケーションを周りの子どもが理解できるように大人が言葉を付け加える。

4-4 年齢や個人差はあるが、保育者が代弁しすぎず子どもが伝え合う良い機会として、玩具の取り合いや遊びを巡るトラブルなどは話し合いなどで解決できるようにしていく。

memo

3-2 子ども同士で話し合う

幼児編

③ 絵本
（印刷文字に親しむ環境）

＜項目の視点＞
★ 絵本環境
★ 絵本に触れる時間
★ 絵本を使う取り組み
★ 文字に親しむ

段階		評価項目	いいえ	はい
1	1-1	子どもが手に取れるような絵本がほとんどない		
	1-2	子どもが絵本に触れる時間がない		
	1-3	保育者は、子どものために本を読むことがほとんどない		

段階		評価項目	はい	いいえ
2	2-1	絵本コーナーなどが設けられていて、子どもが手に取れる場所に本がある（10人に対して20冊程度）		
	2-2	絵本や文字に触れられる環境や時間がある		
	2-3	保育者は、1日に1度は絵本の読み聞かせを行っている		
3	3-1	絵本の種類が豊富で、テーマごとに整理された絵本コーナーが設けられている		
	3-2	絵本や文字に触れている環境や時間が適切にある		
	3-3	絵本やポスターや写真・絵カードなどを使った文字に関心がもてる活動がある		
	3-4	保育者は、子どもの現状興味に合った絵本を使って、ごっこ遊びをするなど取り組んでいる		
4	4-1	年齢に応じた絵本や現状に合った絵本が常に手に取れるところに置いてあり、絵本や言語教材の入れ替えが行われている		
	4-2	自分で絵本を選び触れることのできる時間が十分に確保されている		
	4-3	保育者は、子どもが興味を持った絵本を題材として、活動を展開している		
	4-4	保育者は、子どもの言葉を書き留めるなどして、文字に関心を持たせ、活動に生かしている		

備考（注釈・事例など）

2-2　1日の活動の流れを絵や写真で示されている。

2-3　絵本の読み聞かせをCDばかりにたよらず保育者が行っている。

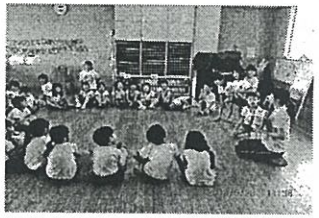
3-1　人権（保育）教育の視点から公立こども園の絵本リストや「人権保育のための絵本リスト」（NPO法人ちゃいるどネット大阪）の絵本リストなどを参考にする。
フィクションとノンフィクションの両方がある。

3-4　視覚障害がある子どものための絵本、子どもの第1言語で書かれた絵本がある。

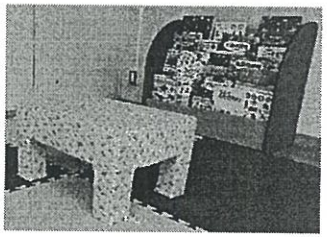
4-1　図書館との連携や情報提供がある。

memo

読み聞かせ ▶



絵本コーナー ▶



Ⅳ　活動（環境があるかどうか）

1：不適切　2：最低限　3：よい　4：とてもよい

①　運動
（粗大運動　体を使う）

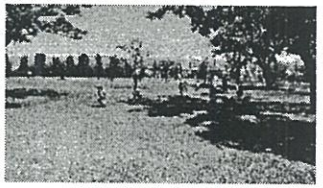
＜各項目の視点＞
- ★ その遊びができる場所（空間）
- ★ その遊びができる遊具（おもちゃや道具）
- ★ 遊ぶ時間
- ★ 保育者の関わり

段階		評価項目	いいえ	はい
1	1-1	体を動かして遊ぶ空間や遊具がない		
	1-2	身体を使って遊ぶことができる時間がほとんどない		
	1-3	保育者は、安全の確保が十分でなく、子どもが楽しんでいることに、共感する保育者がいない		
段階		**評価項目**	**はい**	**いいえ**
2	2-1	体を動かして遊ぶことができる自然・環境や体を動かして遊びたいと思える遊具（ジャングルジム、鉄棒、三輪車、ボール、なわなどのいくつか、あるいは全部）がある		
	2-2	決められた時間ではあるが（30分程度）、体を動かして遊ぶことができる		
	2-3	保育者は、見守りによって安全を確保している		
3	3-1	色々な動きが体験でき、自分から体を動かしたいと思える自然・環境がある		
	3-2	子どもが主体的に選び、遊ぶことができる遊具がある		
	3-3	決められた時間だけではなく、自由に遊ぶことができる時間がある		
	3-4	体幹を鍛えるなど調整力を身に付けることを意識した遊びがある		
	3-5	保育者は、子どもの発達や興味に合わせて、柔軟に対応している		
4	4-1	主体的に遊びたい、体を動かしたいと思える自然・環境が用意されている（自然環境だけでなく、それに近い遊具などを使った環境がある）		
	4-2	少なくとも1時間以上好きな遊びができる		
	4-3	保育者は、十分な安全を確保すると共に、挑戦する姿を止めずに最後まで見守っている		
	4-4	保育者は、子どもが今楽しんでいることから、発展できるように、次の発達を見通した提案をしている		

備考（注釈・事例など）

1-1　公園や屋上など、体を動かすことができるスペースが、園の中だけでなく、近くにもない。

2-1　園になくても、近隣施設などで体を動かす機会を保障している



3-1　思い切り遊べる環境

3-1　自然の中で、そのような場所が確保できれば理想的。

3-2　年齢に合わせた環境を考える。例えば、歩き始めた子が登れるちょっとしたスロープや、身長に合わせて選べる鉄棒など。

4-1　一つの活動だけでなく、複合的にいろいろな遊び（体の使い方）ができるもの、木登りなど。

4-1　園庭内の木を活用（木登り）

2-1　様々な体の動きが体験できる遊具

memo

幼児編

② 運動
（微細運動：手や指を使う）

＜各項目の視点＞
★ その遊びができる場所（空間）
★ その遊びができる遊具（おもちゃや道具）
★ 遊ぶ時間
★ 保育者の関わり

段階		評価項目	いいえ	はい
1	1-1	いくつかの決まった道具や玩具しかなく、変化したり工夫できるものがない		
	1-2	のり、はさみ、クレパスなど発達に即した道具を使う機会がほとんどない		
	1-3	道具を自由に使う時間がない		
	1-4	保育者は、友達の微細運動に関心をもって関っていない		

段階		評価項目	はい	いいえ
2	2-1	感触を楽しめるなど、指先を使って遊ぶことができる数種類の素材がある		
	2-2	ブロックなど手や指を使う遊具が十分の数があり、作りたいものが作れる		
	2-3	のり、はさみ、クレパスなど年齢にあった手や指を使う道具を使う機会がある		
	2-4	その時間だけでなく、継続して取り組むことができる		
	2-5	保育者は、作ったものを肯定的に認めている		
3	3-1	様々な感触や変化することを楽しめる素材があり、いつでも指先を使うことができる遊びがある		
	3-2	一つのことに没頭したり、こだわったりすることができる時間や空間がある		
	3-3	生活の中(当番活動など)や、遊びで、手先を使う活動がある		
	3-4	保育者は、発達に合わせた道具や遊具で遊ぶときに、子どもが、考えたことを実現していけるように一緒に考え、関わっている		
	3-5	保育者は、作ったものを肯定的に褒め、丁寧に扱っている		
4	4-1	何度でも挑戦できるように、素材や道具、遊具は十分な量がある		
	4-2	継続して取り組むことができ、子どもが、達成感を得られるまで作品を作ることができる環境や時間が用意されている		
	4-3	保育者は、一人一人の興味や関心に合わせて、次の課題を提案している(素材、作り方、道具の種類や使い方など)		

備考（注釈・事例など）

3-3 給食配膳で手や指を使う

3-4 発達に合わせた道具や遊びなどは、参考資料；全体計画の教育課程を参照。

4-2 こだわって作りたい子には、完成させることができるまで取り組めるよう援助する。

4-2 作っては壊しを繰り返しながら友達と遊ぶ

memo

③ 造形

＜各項目の視点＞
★ その遊びができる場所（空間）
★ その遊びができる遊具（おもちゃや道具）
★ 遊ぶ時間
★ 保育者の関わり

段階		評価項目	いいえ	はい
1	1-1	子どもが主体的に作ることができる環境がない（造形の用具、材料に触れる機会がない）		
	1-2	保育者は、子どもが造形活動をすることに関心がなく援助していない		

段階		評価項目	はい	いいえ
2	2-1	造形活動を楽しむことができる場所や用具がある		
	2-2	必要な（切る、貼る、色を塗る、描くなどができる）道具が用意されていて、子どもがその使い方を知っている		
	2-3	色々な技法や工夫を経験することができる		
	2-4	保育者は、発達に応じた活動が計画されていて、子どもに経験させようとしている		
3	3-1	子どもが主体的に自由な発想で作れる道具や素材がある		
	3-2	道具や可塑性の高い素材が、多様に用意されている		
	3-3	モデルとして、本物に出会う機会が十分に用意されている		
	3-4	保育者は、子ども一人一人の思いが実現できるように援助を行い、作ったものについて話をしている		
4	4-1	工夫したり多様に表現できたりする道具や素材が十分に用意されている		
	4-2	自分が納得できるまで作ることができる空間や時間がある		
	4-3	作ったものを多くの方に見てもらえる場所などがある		
	4-4	保育者は、子どもの発達や興味に合わせて、方法、材料などを提案して見守っている		

備考（注釈・事例など）

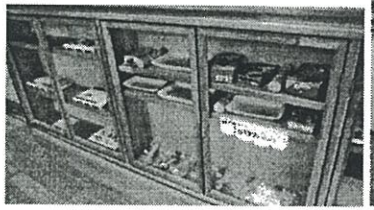
2-2 基本的には、はさみ、のり、クレパスなど、他の道具でも良い。

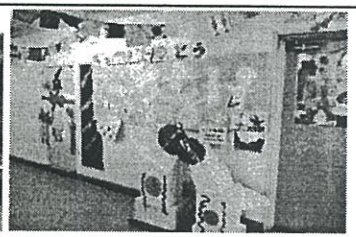
3-1

3-3 本物（たとえば、咲いている花を見たり、虫の飼育をしたり、食材に触れる、動物を見る、触る）を見て、製作するような機会が持てるということ。

4-3 保護者だけでなく、地域の方にも見学できる機会を作るなど。（参観・公開保育など）

memo





4-3 地域の人が見学できるよう、廊下などに掲示

④ 音楽リズム

＜各項目の視点＞
★ その遊びができる場所（空間）
★ その遊びができる遊具（おもちゃや道具）
★ 遊ぶ時間
★ 保育者の関わり

段階		評価項目	いいえ	はい
1	1-1	日常的に使える楽器、歌など音楽に触れる環境がない		
	1-2	リズムに合わせて体を動かす機会がない		
	1-3	常に大きな音で音楽が流れている		
	1-4	保育者は、音楽や歌などに親しむことができるような関わりがない		

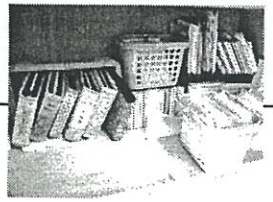
段階		評価項目	はい	いいえ
2	2-1	子どもが自由にならせる楽器が限られているがある（カスタネット　タンバリン　太鼓などどれか一つまたは全部）		
	2-2	BGMを流す場合は、場面や雰囲気に合わせたものになっている		
	2-3	時間は限られているが、曲に合わせて歌ったり踊ったりすることができる		
	2-4	保育者は、年齢や季節に応じた音楽を子どもと楽しんでいる		
3	3-1	打楽器や鍵盤楽器など子どもが自由に鳴らすことができる楽器が多様にある		
	3-2	楽器を自由に鳴らすことができる時間が十分にある		
	3-3	子どもが自分で曲を選択して歌ったり踊ったりできる環境がある		
	3-4	ほとんどの保育者が子どもと楽しんで歌ったり演奏したり踊ったりしている		
4	4-1	様々な音楽や楽器に触れる機会があり、子どもがしたいと思う時にできる		
	4-2	音楽を選び、楽しむことができるCDやDVDが用意されている		
	4-3	いろいろな楽器の演奏を生で聞く機会がある		
	4-4	作詞したり作曲したりすることを経験する機会や保育者の援助がある		
	4-5	保育者は、子どもの興味が広がるように、音楽や楽器など用意して楽しめるように工夫している		

備考（注釈・事例など）

2-3　年齢に合わせた歌や音楽が計画的に用意されているか。（参考・全体計画、年齢別指導計画など）

3-3　友だちと一緒に手作り太鼓をたたいて遊ぶ

4-2　子どもが、CDやDVDを選び、保育者の見守りで、自分で機械を操作してかけることができる。



4-2　子ども自身が選べるように

memo

⑤ ごっこ遊び

＜各項目の視点＞
★ その遊びができる場所（空間）
★ その遊びができる遊具（おもちゃや道具）
★ 遊ぶ時間
★ 保育者の関わり

段階		評価項目	いいえ	はい
1	1-1	生活再現遊び（ままごとなど）をするために必要な場所がない		
	1-2	多様なごっこ遊びを楽しめるおもちゃが不ぞろい、壊れているまたは用意されていない		
	1-3	保育者は、子どものごっこ遊びに関心がなく、一緒に遊んでいない		

段階		評価項目	はい	いいえ
2	2-1	ごっこ遊びに必要な場所やおもちゃがあり、日常的に利用できる（キッチン　食器　食べ物　エプロンなど）		
	2-2	ごっこに必要なものを楽しみながら作ることができる		
	2-3	ごっこ遊びを一緒に楽しむことができる保育者がいる		
3	3-1	年齢に応じたごっこ遊びができるように、必要な材料が多様に用意されている		
	3-2	様々なものに見立てられる素材がある		
	3-3	ごっこの種類によりコーナーに分けられた空間がある		
	3-4	イメージが膨らませやすい環境や、継続して取り組める場所がある		
	3-5	保育者は、子どもの発想を肯定的に受け止め、より面白くするためにモデルになっている		
4	4-1	絵本や経験をもとに子どもが主体的にごっこを展開することができる		
	4-2	保育者は、子どもがイメージしたことを実現させ、発展させるために必要なことを提案している		

備考（注釈・事例など）

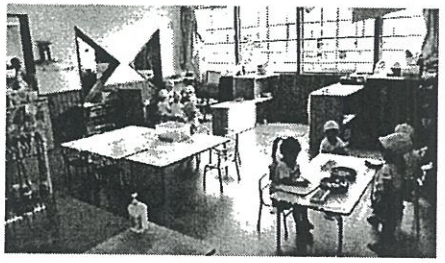
3-1 おうちごっこ遊び

3-2 毛糸を麺にするなど、マカロニや豆、ビーズ、チェーンリングなど、料理の材料にできるような素材。

3-3 一つのごっこ遊びが、十分遊べるように、コーナーを分けて遊ぶ場合や、色々なごっこ遊びが繋がって遊びが発展できるようにするなど年齢や時期、遊び方によって変えられる空間。

4-1 コーナー　材料　モデル　などイメージが膨らむようなものが身近にある　多様で、ステレオタイプではないごっこ遊びができる。

memo



3-3 いくつかのコーナースペース

幼児編

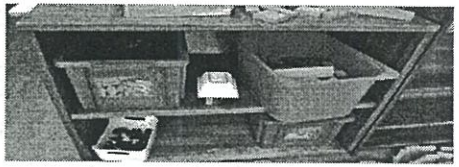
⑥ 積木

＜各項目の視点＞
★ その遊びができる場所（空間）
★ その遊びができる遊具（おもちゃや道具）
★ 遊ぶ時間
★ 保育者の関わり

段階		評価項目	いいえ	はい
1	1-1	自由に使える積木がない		
	1-2	保育者は、積木で遊んでいる子どもに関心を持ったり、楽しさを共感したりしていない		

段階		評価項目	はい	いいえ
2	2-1	自由に使える積木がある		
	2-2	友達と協力して大きなものが作れる場所や時間がある		
	2-3	保育者は、友達と関わることや、工夫して作ることに共感したり肯定的に受け止めたりしている		
3	3-1	自由に使える色々な大きさの積木が十分ある		
	3-2	作ったものを継続して使えたり、飾ったりできる		
	3-3	保育者は、イメージが膨らんだり、工夫したりできるような援助をしている		
4	4-1	大きさや素材の違う積木が、十分にあり、大きなものを作る場所が確保されている		
	4-2	じっくり考えたり、工夫したりすることができる場所や時間がある		
	4-3	立体に対してイメージが持てるような見本がある		
	4-4	保育者は、友達と関わって協力して遊ぶことを大切にして、次の課題を提案している		

備考（注釈・事例など）



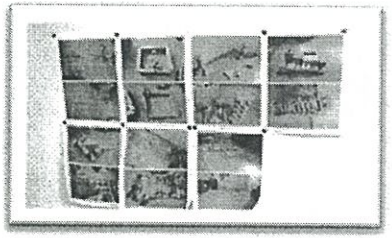
3-1 子どもが自分で選んで積木を出せる工夫

3-1 年齢によっては、倒すことが楽しい子、並べることが楽しい子、積むことが楽しい子などそれぞれの遊びの保証ができるような空間がある。

3-1 様々な形・大きさ・長さの積木で遊ぶ

memo

4-3 子どものイメージを助ける写真

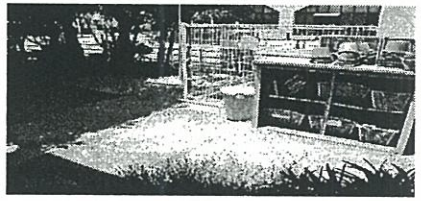


⑦ 砂・水

＜各項目の視点＞
★ その遊びができる場所（空間）
★ その遊びができる遊具（おもちゃや道具）
★ 遊ぶ時間
★ 保育者の関わり

段階		評価項目	いいえ	はい	備考（注釈・事例など）
1	1-1	水や砂を使って遊ぶ場所がない			
	1-2	汚れることを気にせず感触遊びを楽しむ場所や時間がない			
	1-3	保育者は、感触遊びの楽しさより、汚れることを気にしている			
段階		評価項目	はい	いいえ	
2	2-1	水や砂遊びができる園庭や公園がある			2-1 穴掘り、山づくり、トンネル、泥団子、型ぬき、水を流す、池を作るなど。
	2-2	砂や土、水を使って自由に遊べる時間がある			
	2-3	保育者は、感触を一緒に楽しんでいる			
3	3-1	砂や土、水を日常的に自由に使うことができる			3-1 雨水も活用。砂、水などを自由に使って遊ぶ
	3-2	必要なおもちゃがすぐ取り出せる場所にある			
	3-3	保育者は、一緒に感触を楽しみ、気持ちや発見に共感している			
	3-4	ほとんどの保育者が汚れることを気にせず、楽しんでいる			
4	4-1	発達や興味関心に応じて、選択できる複数の場がある			4-1 壊したい子、作りたい子がお互いに十分楽しめるよう、活動が保証できるような空間。
	4-2	水を混ぜる、流すなど遊びを展開できる素材や遊具がある			
	4-3	保育者は、砂や土の性質の違いなどの知識があり、遊び方のモデルになっている			4-3 子どもの年齢により、遊び方のモデルのあり方は違う。

memo



3-2 必要なおもちゃが、すぐに取り出せる

幼児編

⑧ 自然・科学

＜各項目の視点＞
★ その遊びができる場所（空間）
★ その遊びができる遊具（おもちゃや道具）
★ 遊ぶ時間
★ 保育者の関わり

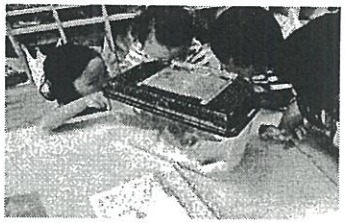
段階		評価項目	いいえ	はい
1	1-1	植物や小動物、虫など自然に触れることができる場所が身近にない		
	1-2	自然事象などを体験したり、見たりすることができない		
	1-3	保育者が、自然事象などの不思議さや美しさなどに共感しないし、話をしない		

段階		評価項目	はい	いいえ
2	2-1	身近に植物や昆虫など自然に触れられる場所がある		
	2-2	不思議に思ったこと、興味があることを調べたり、試したりすることができる		
	2-3	保育者は、自然に関わって感じた不思議さや発見を共感している		
3	3-1	日常的に、自然物や科学遊びの素材に触れることができる		
	3-2	不思議に思ったことを追求できる教材がある		
	3-3	いろいろな物のリサイクルについて知る環境がある		
	3-4	保育者は、自然にかかわる遊び、科学遊びを子どもと共感し、一緒に調べるなどモデルになっている		
4	4-1	日常的に自然に触れられる環境があり、継続的に取り組むことができる		
	4-2	不思議だと思える仕掛けが園内にある（意図的あるいは意図的でない）		
	4-3	保育者は、自然や科学について知識を持ち、子どもの遊びが深まる指導をしている		

備考（注釈・事例など）

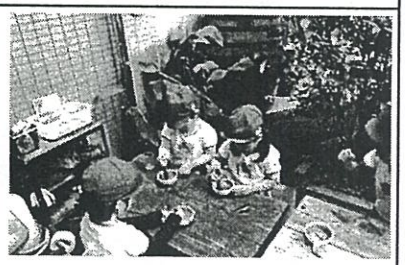
2-1 園庭など自然に触れる場所や、外に出られなくても窓があって外が見えるなど。

2-2 絵本、図鑑などの図書　視聴覚教材　色水など作る素材や道具　PCなど。



3-1 アゲハのたまご・幼虫を観察

memo



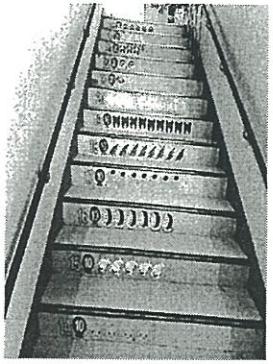
3-4 花びらを使って色水遊び

⑨ 算数・数

＜各項目の視点＞
★ その遊びができる場所（空間）
★ その遊びができる遊具（おもちゃや道具）
★ 遊ぶ時間
★ 保育者の関わり

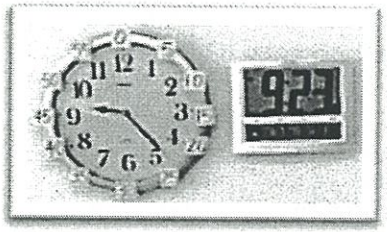
段階		評価項目	いいえ	はい	備考（注釈・事例など）
1	1-1	日付や時計、その他数字に親しめるような環境がない			
	1-2	形、量、大きさ、重さなどを感じられるような環境がない			
	1-3	保育者は、数に興味が持てるような援助や、配慮をしていない			
段階		評価項目	はい	いいえ	
2	2-1	カレンダーや時計など生活の中で子どもが触れられる数の環境がある			2-1 カレンダーを子どもと作るなど。
	2-2	数、量や大きさの違いが分かるような体験（比較）ができる遊具や遊びがある			
	2-3	保育者は、形、大きさ、量などに気付けるよう関わっている			
3	3-1	生活の場面で、日付や時間を確認したり、数量を比べる、重さを量るなどの体験ができる			3-1 おやつを配る、グループの友達の数だけ画用紙を取りに行く、時間までに片付けるなど当番活動やお手伝い、生活の中で、意識して数に触れられるようにする。
	3-2	遊びの中で、楽しみながら数量の違い、重さの違いなどに触れることができる			
	3-3	保育者は、数（算数）に楽しみながら触れられるよう教材を用意し、活動を考えている			
4	4-1	子どもが遊びや生活の中で、自由に計ったり、比べたりできる道具がある			4-1 子ども達が、大きさや重さを量りたいと思った時に、利用できるものが身近にある。（はかる：量る・測る・計る）
	4-2	数や量について実体験で出会える機会が豊かにある			
	4-3	保育者は、数える、計る、比べることを利用して活動を広げられるよう援助している			

memo



4-2 数に触れられる環境

3-1 数字に親しむ（時計作り）



4-1 アナログ時計とデジタル時計のある環境

幼児編

⑩ ICTの活用

＜各項目の視点＞
★ その遊びができる場所（空間）
★ その遊びができる遊具（おもちゃや道具）
★ 遊ぶ時間
★ 保育者の関わり

段階		評価項目	いいえ	はい
1	1-1	生活や遊びの中に、ICTを活用する機会がない		
	1-2	年齢にふさわしくない使い方をしている（ゲームやテレビを見るなどの時間が長いなど）		
	1-3	保育者は、ICTについて知識がなく、保育の中で利用しようとしていない		

段階		評価項目	はい	いいえ
2	2-1	生活や遊びの中で、調べる一つの手段としてPCなどを利用することがある		
	2-2	テレビを見る時は時間を決めている		
	2-3	保育内容が広がるように、デジタル教材、カメラ、DVDなどを利用する		
	2-4	保育者は、調べたり、情報を共有するためにデジタル教材などを利用している		
3	3-1	DVD、CDプレーヤーやPCがあり、子どもが、保育者と一緒に使うことができる		
	3-2	保育や子どもの疑問に答えるため、保護者への発信など、必要なときには積極的に利用できる		
	3-3	保育者は、子どもと一緒に、PCなどを使って、情報活用しようとしている		
4	4-1	保育者の管理下で、時間を制限しつつ、タブレットを使って、映像、写真を見たり、調べたりすることができ、イメージを膨らませて遊ぶことができる		
	4-2	子どもが利用したい時に利用できるデジタル教材がある		
	4-3	保育者は、子どもの情報活用能力の育成のため、十分な知識と計画を持ってICTの活用をしている		

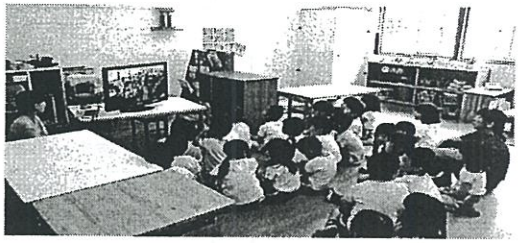
備考（注釈・事例など）

ICTとは

Information and Communication Technology

「いつでも・どこでも・なんでも・だれでも」

簡単にネットワークが利用でき、世代や地域を超えたPCの利用や人と人、人とモノを結ぶコミュニケーションを重視。文科省では、公立学校においてPCやデジタルテレビを導入し、子ども達の情報活用能力の育成を図るための「ICT環境整備事業」を展開している。



2-1 クラスで振り返りを行う手段の一つとしてビデオを活用

3-2 パソコンで虫を調べている保育者と子ども

memo

⑪ 多様性の受容

＜各項目の視点＞
★ その遊びができる場所（空間）
★ その遊びができる遊具（おもちゃや道具）
★ 遊ぶ時間
★ 保育者の関わり

段階		評価項目	いいえ	はい
1	1-1	多文化など日本とは異なる社会や文化に親しむ環境がない		
	1-2	多様性を受容できるような環境や保育の計画がない		
	1-3	保育者がステレオタイプの対応をしている		

段階		評価項目	はい	いいえ
2	2-1	世界地図や旗などいろいろな国があることを子どもに知らせる環境がある		
	2-2	子どもが、多様な文化に触れる機会がある		
	2-3	子どもが、自分の地域や国の文化などを知る機会がある		
	2-4	保育者は、多文化など多様性を理解して、違いを認めている		
3	3-1	クラスに応じた多文化への興味、関心が広がる教材がある（ダンス　歌　絵本　ことば　食育など）		
	3-2	多様な国、家族構成、肌や体の違いなどを認め合えるような保育計画や環境がある（たとえばジェンダーを固定的に捉えるような遊具は置かないなど）		
	3-3	自分の園のことや、地域、国のことなど知っていて、そのことについて話せる機会がある		
	3-4	保育者は、多様性を受容し、決めつけた見方で見ないで、認め、知っていこうとしている		
4	4-1	子どもが多様な文化に触れる機会をもつ		
	4-2	自分の知っている園のこと、地域のことなど、子どもが発信できる機会がある		
	4-3	保育者は、多様性を受容できるような援助ができる		

備考（注釈・事例など）

2-3　様々な国のお話を聞く機会を大切にしている（例えば、国際交流センター職員招聘するなど）

2-4　ルーツとなる国が違うということだけでなく、LGBTの問題や障がいを持っている子ども、家族の在り方、ジェンダーやマイノリティに対して、同じところ、違うところを肯定的に受け止め、理解できるような機会があり、固定的なイメージにつながるような教材、遊具について見直していくことが必要。様々な違い（多様性）を受け入れることで、一人一人が豊かになるように保育の中に生かしていく。

4-1　たとえば、「言葉」では手話、色々な国の言葉、ジェスチャーなどに触れるということ。

memo

3-2　世界の食事を紹介

3-2　様々な肌の色の赤ちゃん人形で遊ぶ

幼児編

① 個別的な指導と学び
（子ども理解と子ども理解の上に立った保育者の関わり）

＜項目の視点＞
★ 個々の子ども理解
★ 個々の子どもに対する適切な援助
★ 多様な保育者の援助
★ 職員間の連携

段階		評価項目	いいえ	はい
1	1-1	保育者主導で、子どもは同じやり方、同じ活動をしなければならない		
	1-2	保育者は、子どもに個別に注目することがなく、子どもを理解していない		
	1-3	保育者は、問題が起こらない限り、子どもを見ていない		
	1-4	教職員間で子どものことを話す機会がない		

段階		評価項目	はい	いいえ
2	2-1	保育者は、子どもの表情、言葉、行動から、子ども理解をしている		
	2-2	保育者は、クラスの子どもの興味や関心に沿った遊びの設定をし、援助している		
	2-3	保育者は、管理性の強い関わりではなく、共感したり、見守ったりして関わっている		
	2-4	援助の仕方について、教職員間で話し合う機会がある		
3	3-1	保育者は、表情や行動などを観察・記録し、遊びの何を楽しんでいるかなど内面を理解しようとしている		
	3-2	個々の興味や関心を引き出し、その思いに沿った援助をしている		
	3-3	保育者は、対等性を大切にしながら、共感、見守りだけではなく、モデル、共同作業者としての援助をしている		
	3-4	子どもの内面の育ちについて話し合いを行い、日々の姿や、変化、関わり方などについて、職員間で共有できている		
4	4-1	複数の保育者が、観察、分析を行い、客観的な子ども理解を行っている		
	4-2	保育者は、子どもの内面の理解から、援助してほしいと思っていること（次の遊びの展開につながるようなこと）をわかって援助する		
	4-3	保育者は、対等性を大切にしながら、共感、見守り、モデル、共同作業者など姿や時期・発達に応じた援助をしている		
	4-4	子どもの内面の育ちを、言葉にし、映像化して話し合うことで、教職員間で関わりや、課題を共有している		
	4-5	保育者は、保護者にドキュメンテーション、ポートフォリオなどで子どもの様子を伝えている		

備考（注釈・事例など）

2-1 子ども理解の方法は、いろいろあるが、園で工夫して理解しようとしているかどうか。

3-1 子ども理解について、記録したり、分析したりできているか。場合によっては、カリキュラムを参考にする。

3-4 職員間で共有するための会議や、カリキュラムなどの共有について参考にする。

4-3 保育者だけでなく、子ども同士の援助や関わりが、対等な関係の中であるかどうかを見ることで、保育者の関わり方も見えてくる。

memo

4-5 ドキュメンテーション

4-5 付箋で子どもの姿を出し合って子ども理解を深める

② 保育者と子どものやり取り（保育者と子どもの関係）

＜項目の視点＞

★ 特定の保育者との関わり

★ 子どもが安心できる保育者の関わり

★ 人との心地よい関わりのモデルや、援助

段階		評価項目	いいえ	はい
1	1-1	必要なことがない限り、保育者と子どもが関わることがない		
	1-2	関わることが難しい子どもに対して、関心がなく、関わらない		
	1-3	保育者は、年齢や時期、子どもの姿に合わせることがなく、いつでも援助している		

段階		評価項目	はい	いいえ
2	2-1	子どもに関わっていく保育者がいる		
	2-2	保育者に関わられると子どもは喜んで関わっている		
	2-3	保育者は、子どもの姿に合わせて援助の方法を変えている		
3	3-1	保育者のほとんどがやさしい声で目線を合わせての言葉掛けやスキンシップなどを行い、子どもが関わられることに安心している		
	3-2	保育者は、子どもが気持ちをうまく表現できない時（トラブルの時等）に、じっくりと関わる時間を持ち、子どもの気持ちを大切に対応している		
	3-3	保育者は、年齢や発達の姿に合わせた援助をしようとしている		
4	4-1	保育者は、子どもと対等に、応答的に関わっている		
	4-2	保育者は、子どもがどのような出し方をしていても、肯定的に受け止め、やり取りしている		
	4-3	年齢や発達だけでなく、一人一人の様子や、家での様子を把握して、その子に合わせた関わりをしている		

備考（注釈・事例など）

2-3 子ども理解を前提に、その子の課題や年齢に合わせた援助や関わりがあるかどうかを見ていく。（たとえば、3歳児ではみんなの着脱を手伝うけれども、5歳児は、その子の課題にもよるが、自分でしようという意欲や、友達に手伝ってもらってできることを目指すなど）

3-3 会議は、子どもの今の姿から始めていくなど、職員同士で、こども理解を共有できる資料の工夫をして、それをもとに話していくことが大切。その中で援助の方法についても共有していく。

memo

幼児編

③ 子どもと子どものやり取り

＜各項目の視点＞
★ 友達と過ごすことができる環境
★ 子ども同士のやり取りのモデルとなる保育者
★ 保育者の関わり

段階		評価項目	いいえ	はい
1	1-1	保育者主導の保育がほとんどで、子どもが仲間を見つけて遊ぶことができない		
	1-2	子ども同士のやり取りがほとんど否定的である		
	1-3	保育者は、子ども同士の肯定的なやり取りを指導することがなく、けんかなど止めることが必要な時だけ関わっている		

段階		評価項目	はい	いいえ
2	2-1	遊びの中で、友達と一緒に遊ぶ空間や楽しさを共感できる時間がある		
	2-2	保育者は、子ども同士がやり取りするなど関わることができる遊びを計画し、関わり方のモデルになっている		
	2-3	保育者は、友達との否定的なやり取りが続くときは、互いの思いを出すようにし、納得できるように解決している		
3	3-1	自由遊びなどの時に、ほとんどの子どもが、友達を気にしたり、関わったりして遊ぶことができる		
	3-2	遊びや生活の中で、子ども達が自分で考えたり、保育者が提案して考える活動がある		
	3-3	保育者は、否定的なやり取りも大切にして、互いの思いを聞きあうことで解決しようとし、それを見守ったり援助したりする関わりがある		
4	4-1	ほとんどの子どもが、友達と関わって活発に遊んでいる		
	4-2	困っている子ども（泣いている子どもなど）がいることに気付いて関わって行こうとする子どもがいる		
	4-3	イメージを共有したり、協力したりする活動があり、自分達で遊びや生活を作っていくことができる		
	4-4	保育者は、否定的な関わり（友だちとのけんかや一方的な見方など）があった時に、どう解決すればいいか子ども達が気付いていけるような関わりをしている		

備考（注釈・事例など）

2-1 保育者が、子ども同士の関係を理解しているかどうかが大切。どんな関係性で遊んでいるのかを把握しておく。そのためにも、子ども理解の中で、関係について記録、分析することが必要。

2-3 子ども同士のけんかについては一つの関係として大切にする。関係性の弱い子どもはけんかをすることもないので、けんかできるようになって、その子の成長を感じることもある。

3-1 子ども同士の関係性を育てるためには、段階的に年齢で抑えるべき関わりの姿がある。5歳になったから、話し合いができるということではないので、そこまでの道筋を、全体計画の発達の姿や、教育・保育課程などを参考に抑えておくことも必要。

3-2 友達が協力したり、上手く遊べるようにするためのルールを自分たちで考えたりすることができる活動。

4-4 前提として、友達の気持ちを尊重しながら解決できるようにする。また、年齢によって、解決の方法が違うが（例えば、同じ量で配ることが公平だが、その子によって、量が違っても、公平な場合もあることなど）子どもでは気づけないようなことを、保育者が伝え、考えていけるようにすることなど。

memo

3-2 友だちと一緒に考えながら製作

4-2 クラスでの話し合い
（運動会の役割決めの場面）

④ 望ましい態度・習慣の育成

＜各項目の視点＞

★ 園での様々なルールを子どもに伝える

★ 心地よい人との関わり方を保育者がモデルになって知らせる

★ 良い行動を褒め、成功体験をもとに 望ましい行動ができるような関わり

段階		評価項目	いいえ	はい
1	1-1	保育者から管理的にルールなどを示し、手を上げるといった体罰や、声を荒げる、食事をさせないなど子どもの人権を無視した方法で守らせようとする		
	1-2	ほとんど決まりや統率がなく、保育者は子どもが危険なことをしていても関心がない		
	1-3	保育者の子どもに望んでいる行動が、発達や年齢に即していない		

段階		評価項目	はい	いいえ
2	2-1	保育者は、園での様々なルールを、子どもに分かるように伝え、守れるように言葉を掛けている		
	2-2	子ども達がわかるように掲示（絵や文字で）している		
	2-3	保育者は、心地よい人との関わり、年齢にふさわしい関わりを意識してモデルになっている		
	2-4	保育者は、子どもの望ましい行動を認め、望ましくない行動に対して、なぜだめなのかを丁寧に伝え、繰り返し伝えることで、子ども自身が気付けるようにしている		
3	3-1	保育者は、園でのルールがなぜあるかを子どもに丁寧に説明し、その他に必要なことがないか、友達と考えていくようにしている		
	3-2	友達と一緒にルールが解る掲示を考え必要な場所に掲示している		
	3-3	友達との否定的な関係や、遊びの中での問題などを解決していくために、気持ちを伝え合ったり、関わったりする方法を保育者と一緒に考えている		
	3-4	保育者は、望ましくない行動に対して、なぜそうなってしまったかを聞き、どのような行動をとっていけばいいかを考えたり、伝えたりして、良かったことを積極的に認めていく		
4	4-1	子ども達が、安全でみんなが心地よく過ごせるためのルールを守る必要性を感じて生活する		
	4-2	必要なことは子ども自身が考えて掲示物を作っている		
	4-3	友達同士の否定的な関係や、遊びの中での問題など上手くいかない時は、子ども達がその解決に積極的に関わる		
	4-4	子どもたちのほとんどが、友達の気持ちを共感したり、気付いたりすることができ、相手を思いやる、尊重する気持ちを持って関わることができている		

備考（注釈・事例など）

1-2　危険については、1-⑤の項目でチェックする。

1-3　それぞれの園で決められているルールや望ましい態度を生かして、チェックポイントとしては、子ども自身が納得して、主体的に取り組めているかということが大切。

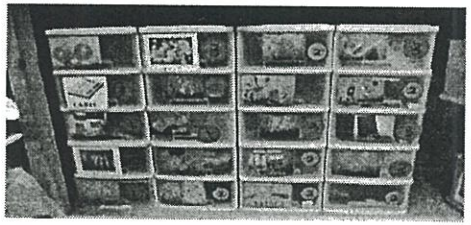
2-4　ルールや態度のベースは、子どもの命を大切にする、子どもの人権を守るということ。要領や指針にあるように、生きるための基礎を培うということは外さないようにする。

3-3　友達とのコミュニケーション力につながること。一人一人の興味や関わり方を大切に、一律な関わりではなく保育者が肯定的に受け止めていきたい。

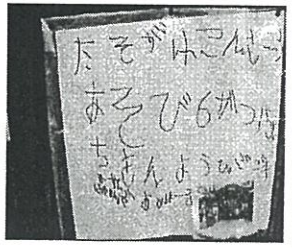
関わり方を保育者が認める、好きと言ってもらえる大人がいることで、関わり方を認めてもらえる大人がいることが、子どもの自己肯定感を高めることにもつながっていく。

4-2　遊びに必要なものを作る（看板作り）

memo



2-2　廃材を分類した棚



幼児編

Ⅵ 保育の構造（日課）

幼児編

① 1人1人が自由に遊びを選択して遊ぶ活動

＜項目の視点＞
★ 時間
★ 適切な教材や活動
★ 保育者の関わり

段階		評価項目	いいえ	はい
1	1-1	子どもが自由に遊びを選択して楽しめる時間がない		
	1-2	自由に遊べる教材や遊具、空間がない		
	1-3	教材があっても、年齢や興味に合っていない		
	1-4	保育者は、子ども達の遊んでいる姿に興味を持ち、関わっていない		

段階		評価項目	はい	いいえ
2	2-1	子どもが自由に遊びを選択して遊べる時間がある		
	2-2	子どもの年齢に合った教材などの環境が用意されている		
	2-3	子ども達が、楽しめるように、保育者が一緒に遊ぶなど関わりがある（遊びに入れていない、見つけられない子には、保育者が関わる）		
3	3-1	子どもが見通しを持てるように、自由に遊びを選択して遊べる時間が、毎日同じ時間にある（室内だけではなく、外で体を使って自由に遊べる時間が一日のうち1時間以上ある）		
	3-2	年齢や季節に合わせた教材が用意されていて、子ども達が自分達で準備できるなど、一人あるいは、友達と関わって遊ぶことができる（異年齢も含めて）時間や、場所がある		
	3-3	保育者は、子どもの興味や関心に合わせて遊びを楽しみ、共感している		
	3-4	好きな遊び、友達が見つからない子どもに、保育者が関わると共に、友達とつなげていくような関わりをする保育者がいる		
4	4-1	教材や遊具は、子どもの興味のあることで、クラスのテーマや現状に合ったものである		
	4-2	保育者は、自由遊びを通して、全体の様子に注意をし、子ども達が、思考力、判断力、表現力が育つように興味関心を広げ、語彙豊かに意識して関わる		
	4-3	保育者は、一人一人の遊びに寄り添い遊ぶことで、どんな遊びで、何を楽しんでいるのかを把握している		
	4-4	保育者は、子どもの楽しんでいることを基に、次の展開や、楽しんでいることの違う子ども同士をつなげる活動を提案している		

備考（注釈・事例など）

2-1 自由に遊びを選択して遊ぶ活動とは、自発的・主体的に過ごすことができる時間ということ。

2-2 子どもの人数に対して極端に教材や遊具が少ない場合は、数をそろえることが必要になる。

教材や遊具の数は、多ければいいということではなく、園内で、子どもの課題に合わせて意図的にコントロールされているかが重要。

自由に遊びを選択して遊ぶ時間に、物の取り合いや、けんかなどを経験し、解決してうまくいく体験をすることが大切。

3-3 環境を再構成していくなど配慮や援助をする。
子どもが自由に遊びを選択して遊べる時間に、主体的に遊び始めたことを、保育者が方向付けして、集団で遊ぶ遊びにつなげるなど、放任するのではなく、保育者が方向づける。

4-1 教材や遊具は、既製品だけでなく、たとえば、台風で折れて集まった葉っぱや枝も、教材として使える。
職員間で共有する時間や、連携が必要。

4-4 クラスで遊んでいる遊びを、自由に遊びを選択できる時間に子どもたちが主体的に展開して遊んでいるときは、その遊びをクラスで生かすようにすることも大切。

memo

② クラス集団で遊ぶ活動

＜項目の視点＞
★ 時間
★ 適切な教材や活動
★ 保育者の関わり

段階		評価項目	いいえ	はい
1	1-1	話を聞く、待つ時間が長く、座っている見ているだけなど子どもが受動的な状態になっている		
	1-2	子ども達にとって興味、関心のない活動で、難しすぎるなど、子どもにとって何をしているのかわからない活動である		
	1-3	保育者は、子どもにとって受け身の活動が中心で、どの子にも同じ活動をさせようとし、一緒に活動しない子にも無理やりさせようとしている		

段階		評価項目	はい	いいえ
2	2-1	待つ時間が少なく、事前の言葉掛けなど子どもがその日の流れを把握している		
	2-2	子どもの興味関心、年齢や季節に配慮して活動が考えられている		
	2-3	保育者は、集団遊びに入って来ない子どもを、無理に入れるのではなく、その子どもの気持ちに寄り添って、個別に対応する		
3	3-1	一人一人が集中して遊べる時間が設定されていて、子どもが見通しを持てるように目で見てわかるスケジュールが示されている		
	3-2	保育者は、子どもと一緒に活動を考え、集団活動と自由遊びが同じように、クラスのテーマや、現状、興味、関心に合わせた活動にしている		
	3-3	保育者は、子どもとの関係、関わりから、一緒に遊べていない子どもが楽しめる活動を子どもと一緒に考え、応答的で柔軟に活動の仕方を変えている		
	3-4	保育者は、活動を楽しめていない子どもに、周りの子どもを巻き込みながら一緒に活動する楽しさが味わえるようにしている		
4	4-1	クラスの子ども達が楽しめる活動があり、遊ぶ時間の設定がある		
	4-2	子ども達の意見を反映して遊びを決めていき、子どもが積極的に活動に参加する		
	4-3	保育者は、子どもが何を楽しんでいるのかを把握して、友達をつなげる活動の発展を提案するなど、遊びに参加している		
	4-4	集団で遊ぶ遊びを楽しめていない子どもはいない、または、楽しめていないと必ず関わる友達がいる		

備考（注釈・事例など）

2-2 年齢によっても活動が変わる。たとえば、3歳児なら、集団から外れて遊ぶこともあり、見守りが必要だが、5歳児では、チームで助け合うなどの活動も重要になってくる。

集団で遊べているかどうかということではなく、友達同士が意識して、みんなで楽しめる遊びとして遊べる集団になっているかが問題。

3-2 年齢に合わせた活動ではあるが、慣習的に毎年している活動がある。そのクラス、学年の子どもの姿に合わせて、カリキュラムを変更するなど柔軟性を持って活動に取り組んでいるかを知るために、カリキュラムを確認することも必要。

4-2 自由に遊びを選択して遊ぶ活動の中で、集団で遊ぶ活動には入れていない子の楽しんでいる活動や、クラスの子どもたちが楽しんでいる遊びを取り上げることも大切。

memo

幼児編

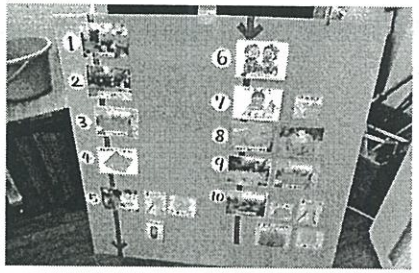
③ 障害のある子どもへの配慮

＜項目の視点＞
- ★ 共に育つ保育
- ★ 保護者への配慮
- ★ 合理的配慮
- ★ 環境や設備、遊具、道具などの配慮
- ★ 研修

段階		評価項目	いいえ	はい	備考（注釈・事例など）
1	1-1	障害のある子どもは、クラスの子と関わらず、個別に保育している			
	1-2	障害に対して、理解しようとしていない（保育者も子どもも）			
	1-3	困ったことがあるとなんでも、保護者に解決をお願いするなど保護者に対する配慮がない			1-3 例えば、「部屋にいないのでいるように保護者さんから言ってください」など、共に考えるのではなく、保護者に解決をお願いするようなこと。
	1-4	その子どもの興味や障害に合わせた設備や遊具、道具などの配慮がない			
段階		評価項目	はい	いいえ	
2	2-1	障害のある子どもに対して、支援計画、指導計画があり、クラスの一員として保育が行われている			2-1 「豊中市障害児保育基本方針」など参考にしながら、共に育つという視点で保育できているかどうか。
	2-2	保護者と悩みや、保育内容について共に考えるなど、話をする時間や場所がある			
	2-3	その子どもが生活しやすい援助の方法を、保育者が知っていて、対応することができる			
	2-4	その子どもに必要な設備や遊具、道具などが用意されている			
3	3-1	障害のある子ども一人一人を大人も子どもも理解しようとし、その子の興味や特性等を理解して活動をしている（障害のある子も含めて、お互いを認め合う集団の中で育ちあっている）			3-2 理解を深めるための教材（絵本など）や、保護者からの聞き取りなどを通して、保育者だけでなく、クラスの子どもも理解できるようにする。
	3-2	その子どもが心地よく生活していくための援助の方法を子どもが知っていて、自然に援助している			3-3 他機関；児童発達支援センター・障害児通所施設、理学療法士、作業療法士、言語聴覚士、臨床心理士、医師などの専門職、支援学校、教育センター等。
	3-3	障害のある子どもを園全体で理解し保育内容やその子に必要な設備や遊具、道具などがよりよくなるように他機関との連携が定期的に行われている			
	3-4	ケース会議や小学校との引継ぎなどが必要に応じて行われている			特別支援コーディネーターをたてて支援をしているか。（支援の方法について、その子どもの課題により、変えていけるような体制があるかなど、長期的な育ちの共有が必要）
	3-5	保護者との対話があり、保育の進め方などについて、保護者の思いを大切に進めている			
	3-6	保護者同士の関係をコーディネートしている			

memo

★環境を見るだけでは、わからないことが多いので、聞き取りを行う。（詳細はこちらにメモ）



2-3,4 視覚支援（1日の時間割を絵や図で掲示）

④ 家庭に配慮を要する子ども【＊】への関わり

＊ 家庭に配慮を要する子どもとは、虐待ケースだけでなく、外国にルーツを持つ子どもなど社会的に差別を受けている家庭も含んでいる。

＜項目の視点＞

★ 他機関との連携

★ 必要な配慮や援助

★ 虐待など見逃さない職員の関わり（研修など）

段階		評価項目	いいえ	はい	備考（注釈・事例など）
1	1-1	他機関とどのように連携すればいいかわからないので連携していない			
	1-2	登園してこない子どもなどがいても、配慮や援助がない			
	1-3	虐待など、子どもの様子を把握していない　また、そのことについて、研修に参加したことがない			
段階		**評価項目**	**はい**	**いいえ**	
2	2-1	保護者の話を聞く時間や場所があり、必要があれば他機関に繋げている			
	2-2	保育者は、子どもの様子を見て、気持ちを受け止めたり、保護者の話を聞いて共感したり、励ましたりする			2-2 子どもが落ち着いて保育を受けられない場合には、落ち着けるように個別に対応するなど、保育内容の工夫をすることも必要。
	2-3	視診を徹底し、生活の中で、身体の様子を把握する			
	2-4	職員が研修に参加し、虐待の基礎的な事を知り、理解を深めている			
3	3-1	他機関や専門分野の方との定期的な連携の機会（ケース会議など）があり、情報を共有し、アドバイスを受けている			3-1 記録をこまめに取っておく。（家庭支援日誌など） ＊ 他機関：池田子ども家庭センター・こども相談課・児童生徒課・児童虐待防止協会・警察など
	3-2	子どもの姿や保護者の話を受け止め、その背景を理解して、配慮や援助をする			3-3 例えば、ネグレクトなどで、ご飯の用意をしてもらえない場合は、園でご飯を炊く体験を行うなど子どもの生活に根差した豊かな体験を増やす活動。
	3-3	子どもの家庭背景を踏まえた状況から、子ども自身が必要な力を付けるための援助方法を考え実施する			
	3-4	保護者の自立のために必要な援助を他機関と連携して積極的に行う			3-4 宗教的なことなど食事や行事と関わってくる問題もあるが、保護者にとって大切な問題なので、何ができて何ができないかはっきりさせたうえで丁寧な話し合いをする必要がある。
	3-5	職員全体で、研修の機会を持ち、対応の仕方や、必要な援助など理解を深めている			
	3-6	虐待などの実態があれば、適切な対応をすることができる			

memo

★環境を見るだけでは、わからないことが多いので、聞き取りを行う。（詳細はこちらにメモ）

幼児編